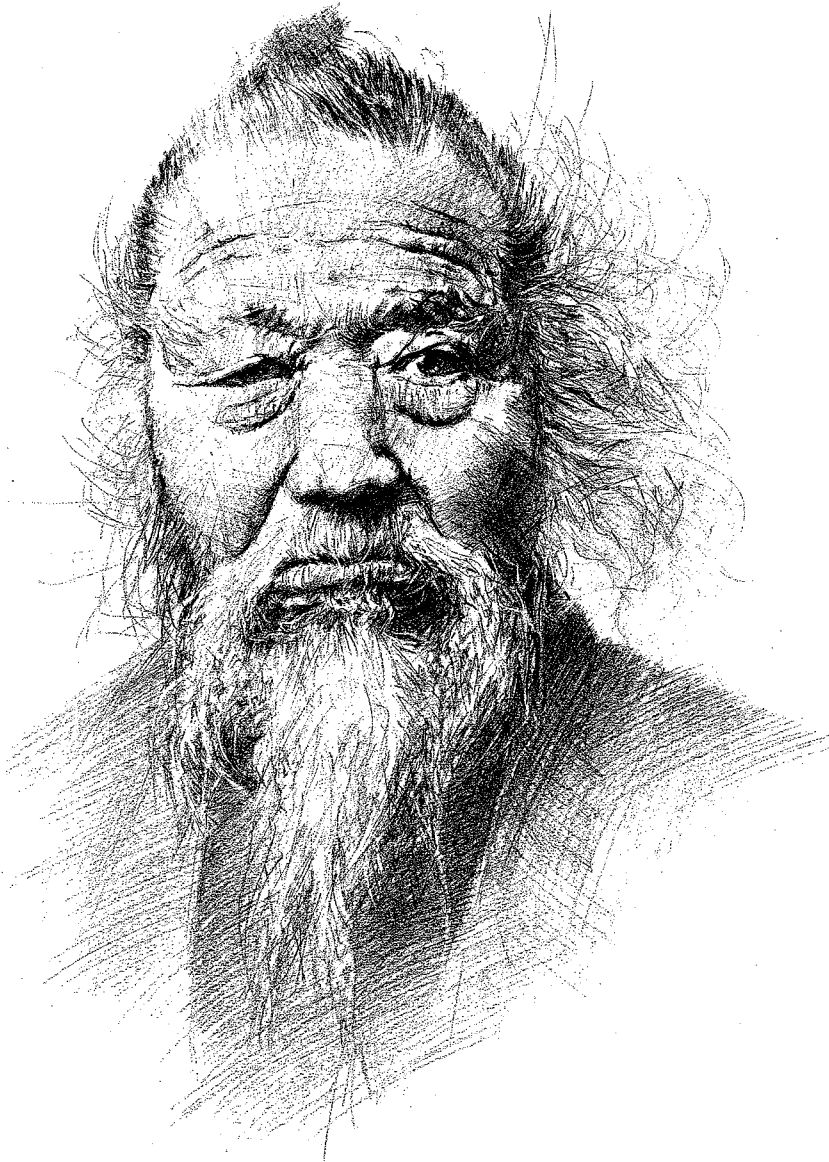


真の文明は山を荒らさず、 川を荒らさず。



田中正造 Shozo Tanaka (1841-1913)

『子どもたちの子どもたちの子どもたちのために』

目方は二十貫(75キロ)、
身の文は五尺一寸(155センチ)。
総髪を振り乱し、左まぶたを三角につり上げ、
鬼気迫る勢いで議場を圧倒。
そしてその男は、大臣席を睨みつけて言った。
「足尾銅山より流出する鉱毒は、
各郡村に年々巨万の損害を被らしむる。
将来如何なる惨状を
呈するに至るやも計り知るべからず」。
その男の名は、田中正造。
天保12年(1841)、下野国(栃木県)生まれ。
明治12年栃木新聞を創刊、
自由民権運動に参加。
県会議員、県会議長を経て、
明治23年第一回総選挙にて衆議院議員に当選。
以後その半生をかけて
足尾銅毒問題と闘いつづけた人物である。
渡良瀬川流域の農民漁民の
生活を脅かした、足尾銅山からの鉱毒流出。
田畑は荒れ、森林は荒れ、
川には白い腹をさらした魚が浮かんだ。
正造はこの惨状に猛然と立ち上がり、
議会および政府を厳しく追及。
鉱業停止と被害民救済を要求する。
各所で演説会を実施し、新聞等へも働きかける。
あらゆる機会をとらえて、
くり返し執拗に訴えつづけた。
しかし政府はのりくりにとかわすばかり。
「議会も政府もだめなら、
⇒ 最後は陛下への直訴しかない」
ついに正造は腹を決める。議員を辞し、
妻には離縁状を送ったとされる。
時は明治34年(1901)、正造すでに60歳。
よく晴れた寒い日であった。
12月10日午前11時20分、
貴族院での開院式を終え
皇居への帰途にあった明治天皇。
正造は右手に高々と直訴状を掲げ、
何と陛下の馬車をめがけて突進したのであった。
しかし沿道を警備していた巡査に
取り押さえられ、直訴は未遂に終わる。
この事件に政府は驚愕。
そしてこれをうやむやにせんと、
また世論も鑑み正造を釈放した。
敬愛してやまない明治天皇への直訴までも
決断せねばならなかった正造。
それはまさに命を賭した死を決しての、
たった一人の行動であった。
その後政府は鉱毒調査委員会(第二次)を
設置するも、これを治水問題にすり替え、
懸案の地域は廃村となり遊水池へ。
そして、栃木県の地図から
消えていった。
「世界人類の多くは、今や機械文明
というものに噛み殺される。
真の文明は山を荒らさず、川を荒らさず、
村を破らさず、人を殺さざるべし」——
正造、心からの叫びである。
大正2年(1913)田中正造が没してから90年。
人類は今、
深刻な環境問題に直面している。